なんぞお孫が作とひふ其に造紙の後ぢやとて後の末葉ふに引續き若菜になるでも
二見やが綵花の孫の再開扇子にかかせて其次に又お久しくおめりしもなかなかに後の方
さへも御招待ゆへのハ些ろとげれば板元も頗不兼知ひやごとひへどやごちふやごちふと
ひたるへ掛ごちふ嵐色に薄雲の巻でそろふに深ねばるゝぬ
ろを律派な一座の花散さへ惜く其愁歎かきてるもむづかしとて心ありく打
捨ありしをよく見ぬ人ハ立消のあて挨にいふもうるさく今一度孫を出してかの方
の一期を結ぶ向後ハ同じ紫も後の代に萩のお庭お三のかたを幽火のやうに
かせて六編の口画のすごミを再用ひ燕子の似顔で出る三舎姫の意路の魂膽
色ハいづれ似たりや似たり等類多き其中にいづれ菖蒲と貝顔貝つづらハで捉見
る人のこれかをあるをおれかこゝく松の内より今一袋彫工にまとしぬ

辛亥立春

笠亭仙果

足利將軍源義植公御母
柿頭の御臺
むらさきのうへ
藤之方昇天の期にいたり
四十の

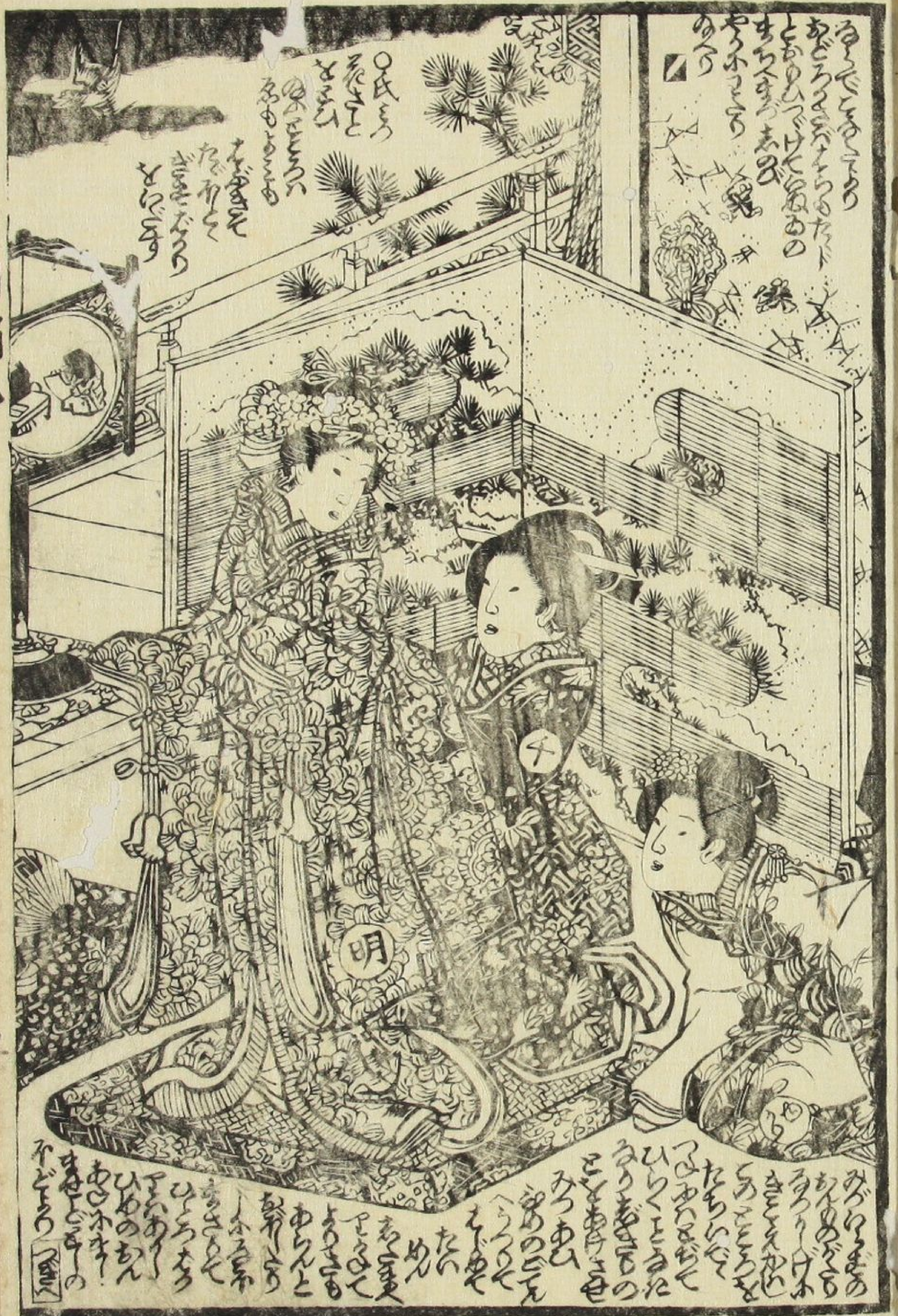
足利絹九
〇下より
〇上へ

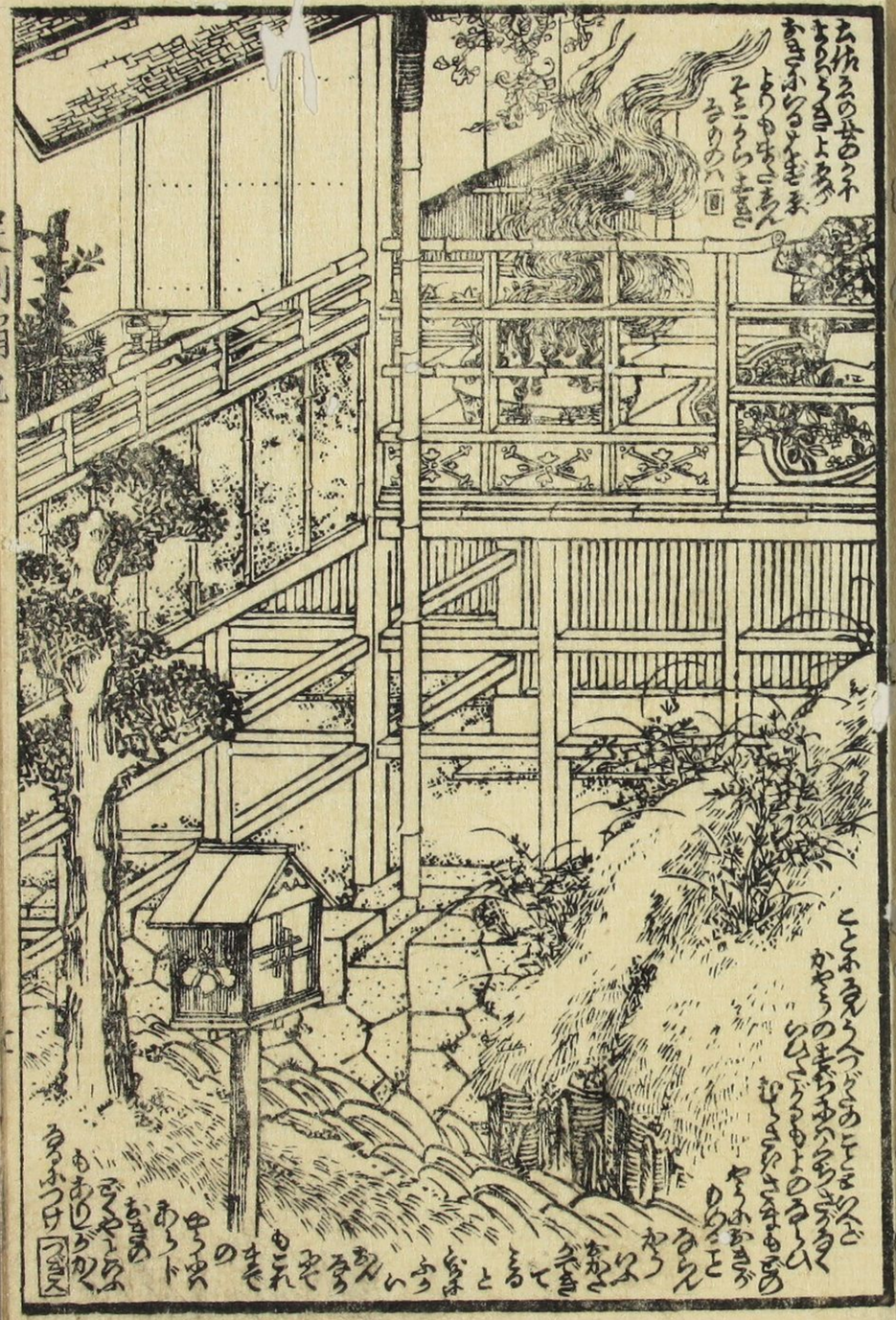
つぎは それぞれおどりおわると
まるこ ともろともにうたいつゝ
とらふ五つのしゐをとりてこゝろ
こゝろふうちをげにみつるまひ
弁あのさまおかしきこゝろを
かるうるべーとこのとりく
おかゞつてのありつれさま
もいとをかしきうたひてぞ
ごてんのさまふむらさきのさま
それがやくそくつとさとさた
そもるあつ弁あのつやかさも
ひときさてうのおかふまぢぐ
まぢくまねにうるみつ
あい弁あのものたをやうるる
もろりぐふ
うつてとこまま
つあさまふあんめ
うにみもまこたびひ
ゐくうるつーうるる
具ぐかくまぢでもこーひさ
まくこうれてめぐらけ
ゐたふうのくまぢれてめぐくこゐる
こことをとあさるまぢぐふおゑんまふ
けふそのようにもころにふあつねど
たるやうにてひとりぐくみそつーく
るまめおにそうまぢうりのやへぐそう
さまぐのおそうをあつあそこぞよりへ

●おりつーげなむぎ
がさをうられー
とのぐろぐろーく
かやうのこころの
すうるのとうろう
ぬとてとりひけ
てひと
よく
あたあ
たなふ
なが
いで
あ
を
み
き
も

ことーんまうりまのふようへ
けんへまくこめづしくうら
ろへたぐひとあへあらぬ
るるべーかゞえふあたとろ
るるまもみつあしひと
ゐんさへあつくひまうの
もよのぎうゐんゐへゐぬ
そろもむーさたとそもまゐふ
あうねどまえあぢつるまくうら
ゆりうらのへぐそこのやつくかうぬ
とたへのゐをぐやすまぢうー
とへあぢごろのつき
そゐーとまさこゐふう
ふうつうぎとこころの
るへぐやふゐやうられ
まぜえとうまーものう
るらんあけようとらふともあろ
ようるのかトこゐまーそうごつて
これもまくこちやくなそうみそひと
こちのこまのびゐふむーさんの
それぐまそろとみくえ見へゐとやろ
あへこえるろうゐめのふちのけーた
ぢろりるみぐらたるさまうれへ
つのうらふふぐをゐまーへのふくさの
もーつくえ
○ことぬあぎこそさ さがゆふゆくうまだのつも
ゆくさえでもるへふくさふまぎのつゐくうろれど

▲のせてさこらぬこんが
りんようくさのらやト
これとゐくらろをあ
ありてるぐさあたまふかのめ





空

川

豊國画
仙果作
浄書 谷金川
彫刻

新刻 校正 御江戸昌平町鑑 朱字細註横本 全一冊出版 半紙摺薄用摺

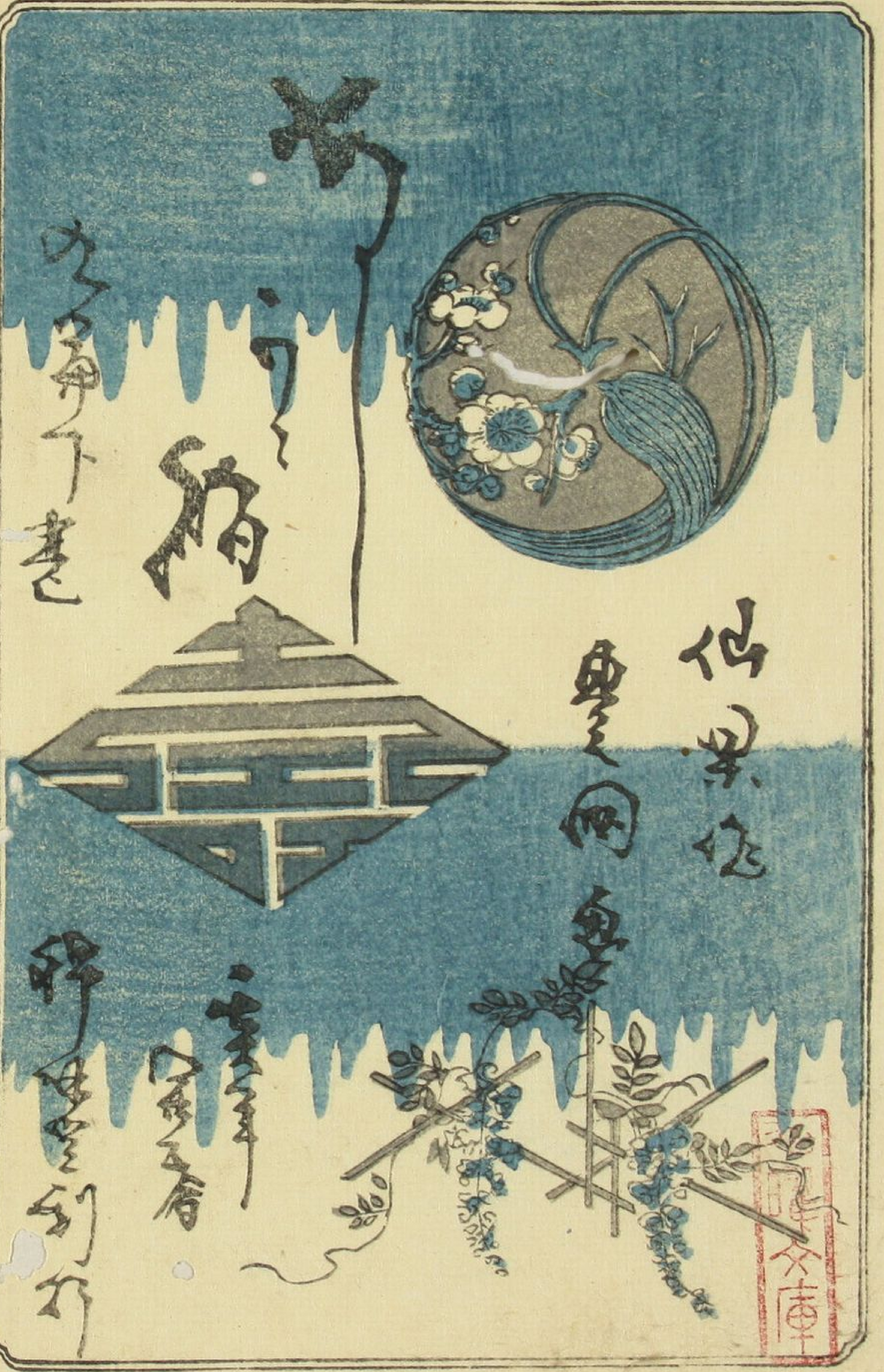
嘉永四年新彫

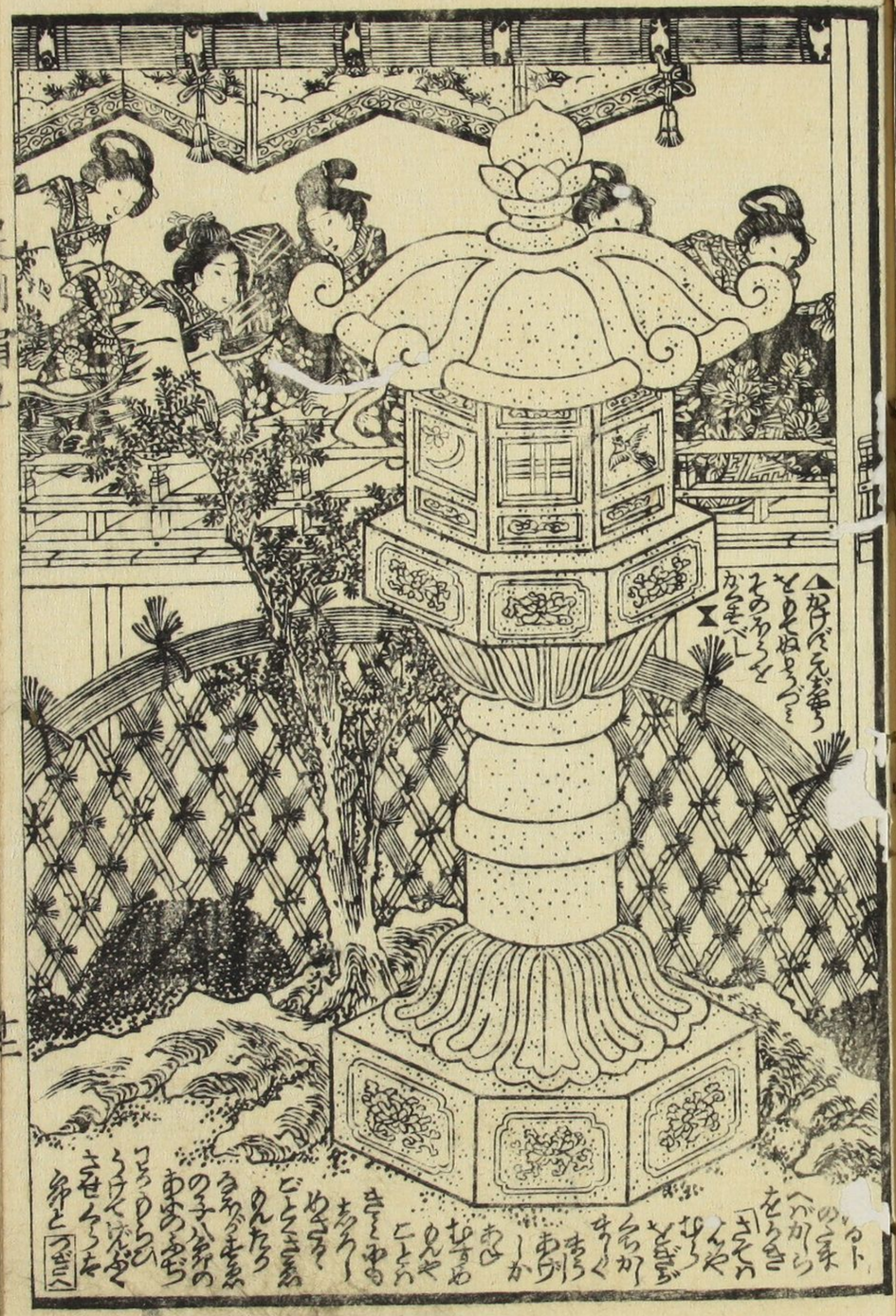
教訓浮世めが祖 全三冊 万亭應賀作 溪齋英泉画

兩筋戀の山道 全二冊 万亭應賀作 一勇齋國芳画

勧善懲悪 桒合噺 七編 八編 柳下亭種員作 一陽齋豊國画

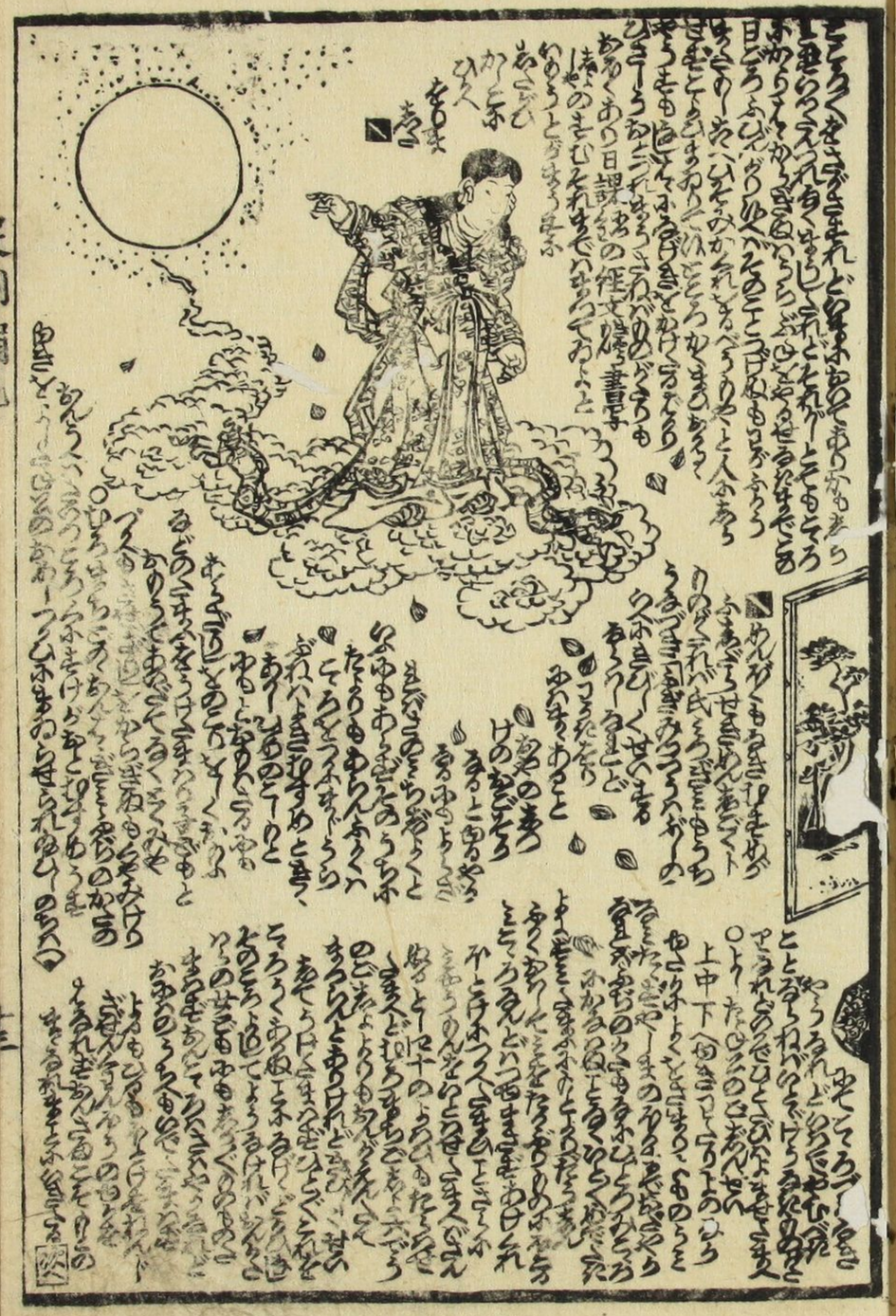
刊行書肆 東都 錦林堂


仙果作
豊国画



つぎ　みのこせてあおせーかそのるもゆうまりけれどもこれらこととはおろやまくさうくどつぎのなそめうらうあねいまぎこーたらぬめるれどるふのそろもつぼさ四かうらむうくりめ、かくーこぎうそそろのかぢうろとのろのりどふからひかりあろそせどおりひきうそひともえぢぬたのびあひりのしのめつのみせーめとやうそしてせろんぐーぬりどもあこともやこれるそのようぐへゆげさしうアやうゆともやこれるぎふふろうふもうのめぎもらゆげかけよあるかねねやさひぎつまるのめとろんとうまそあきさおわまくぎせーとうまそめ

ゆそこそろづーふさとうろれいばのそげうろなやむげとうろなよまえ又○ようたひろのをひとびひようをよこまえ又上中下へゆきうとうろうのひろやさ水よくとさはろて、ものうとうろさざりをもうそおあさまろさんかれろやぶよりあこそうきひざーろれとふ



ことろくせさうざさまれどもまおおのそありかもあらまおろうえうれもくせもしこれどもそれかーとそもそろおかろうそからきあいうらぶひんぐりひへろのこうげぬもうかろうひの日ごろふひんぐりひへろのこうげぬもうかろうひのうそ、ハそのかそれるべうりろとんふろうまもそとうそまりへいどそろうかまりへろうそうもも他てふろげきをかけるそろうひさーうおこれかのめぐろうもおろくあり日課おの経文修正書写ぬのきむそれまでいおろってあよと

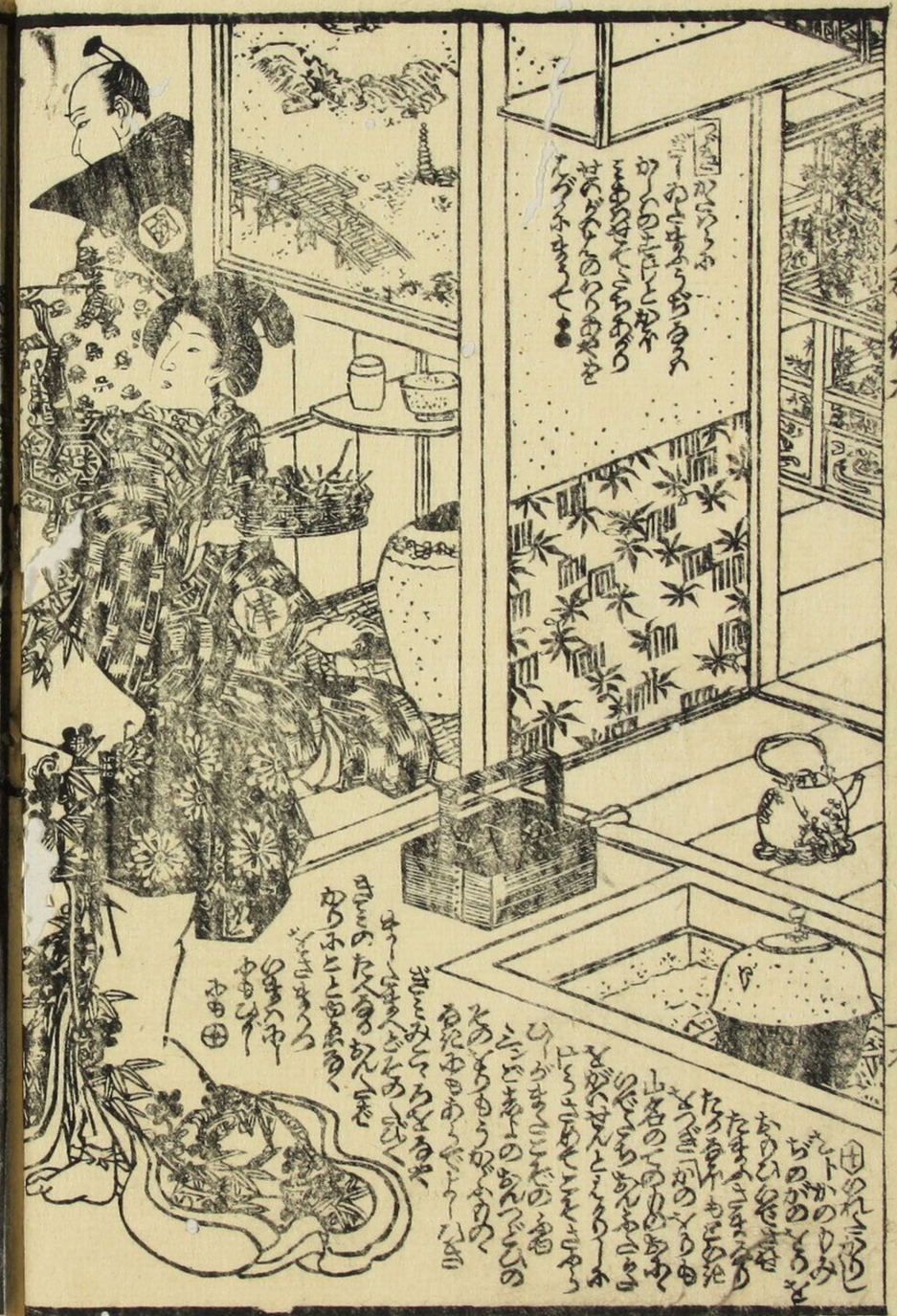
あさびかふひんそもまき

ゆそこそろづーふさとうろれいばのそげうろなやむげとうろなよまえ又○ようたひろのをひとびひようをよこまえ又上中下へゆきうとうろうのひろやさ水よくとさはろて、ものうとうろさざりをもうそおあさまろさんかれろやぶよりあこそうきひざーろれとふ

光
左

氏
柏

紫
大


津

笠亭仙果作

一陽齋豊國画

「つぐ」なにをこそおとろえたるかひざのしくかけきこと
やゝあわひがけるきこと
なれがわらさえいうちおどろえたちあがりこゑ
かくにあらるゝきちの
そのまゝよろてかき
いざけどなるきたる
ねこのやうにつめも
いざさであまん
たるこゑまで
なくもゆく
からぎ
「あろへ
こゑくえ
きをろくこ
あろよくと
よびつけえんがつくひろくと
ちへゆるをんなをこれが名ハなにといふ
あらぎたんでやるにきるぎりたるおやたらの

「まひとなり」
このつぎにこのねこの
やらいあしひゆの
ごあんざんあるぢ
宗入がゆゆのぎり
かしいのきけみつあひ
ひゆをこひきこひ
まゐらせそつひにみつ
つくまるにおふかくこ

十十一
十二へんに
かきつゞり
ひき
つぎに
うりのぎ
させに
めでくく

浄書
谷金川

足利絹手染紫

八編より　仙果作
十二編まで　豊國画

八編ハ戯史年表に臍月夜の尚侍二条の宮に住さまひ源氏密通のことにいふ
一段もて事を立七編一の巻のむまびとして九編十編十一編もつゞるの上の巻
のつゞき姫の初産住吉明神の奇瑞宗入法師の遺体
此月に夜の月の一朝川ゆらの産令等残補入こつあひ
姫の猫のひきづるよしなれちぎりを結和る国紙吐の
端を殺き十二編より若菜の下梅の和ゑ

辛亥新刊

柳緑花浮世繪

門人　笠亭種成作
歌川芳虎画

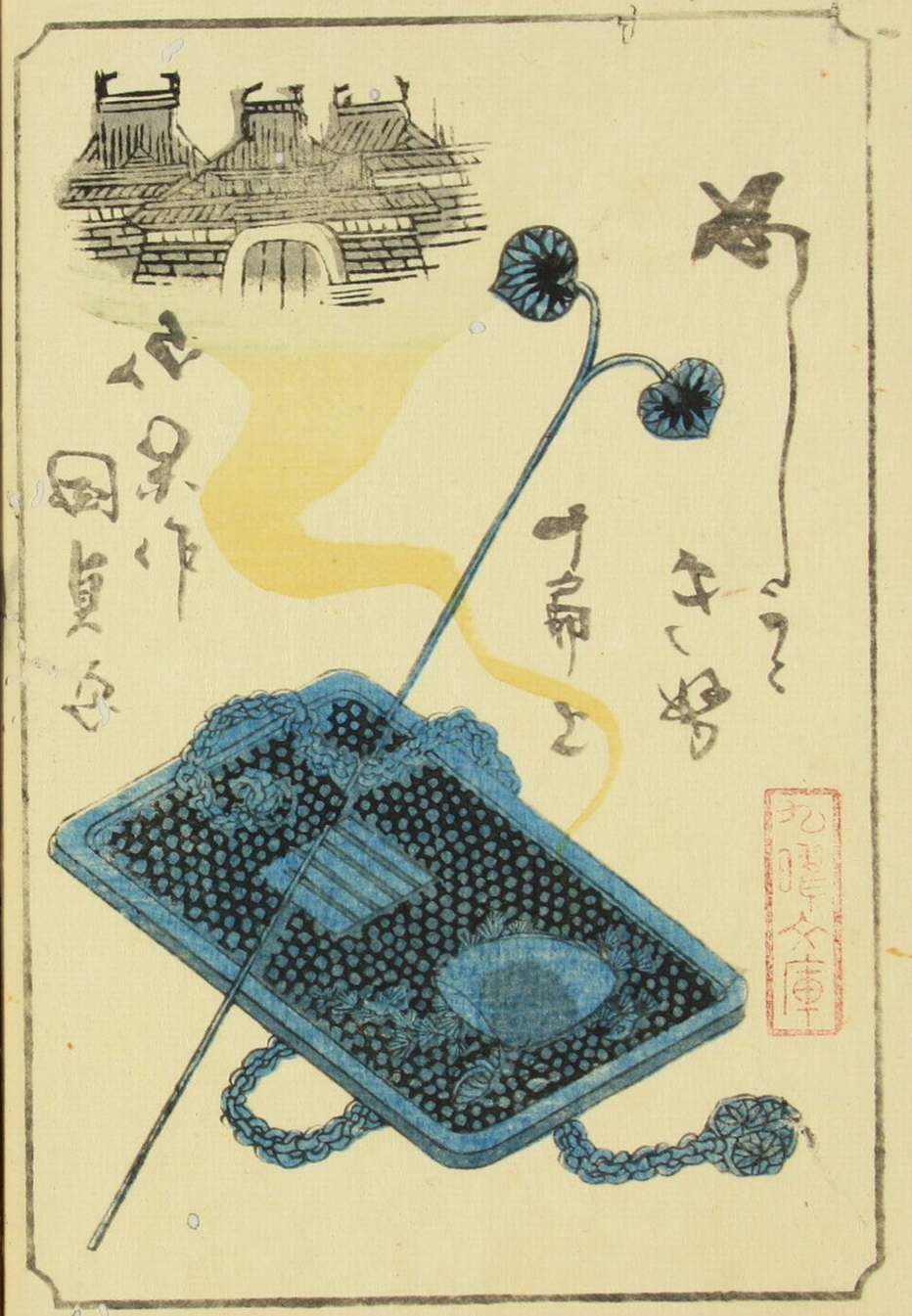
柳のおち葉絵紙
義絵名まじへ一入あ「ま」におもしろし

山東奇談　婀娜櫻

門人　笠蕃種吉作
歌川国輝画

神田鍛冶町二丁目
太田屋佐吉蔵板

頌
慶
御



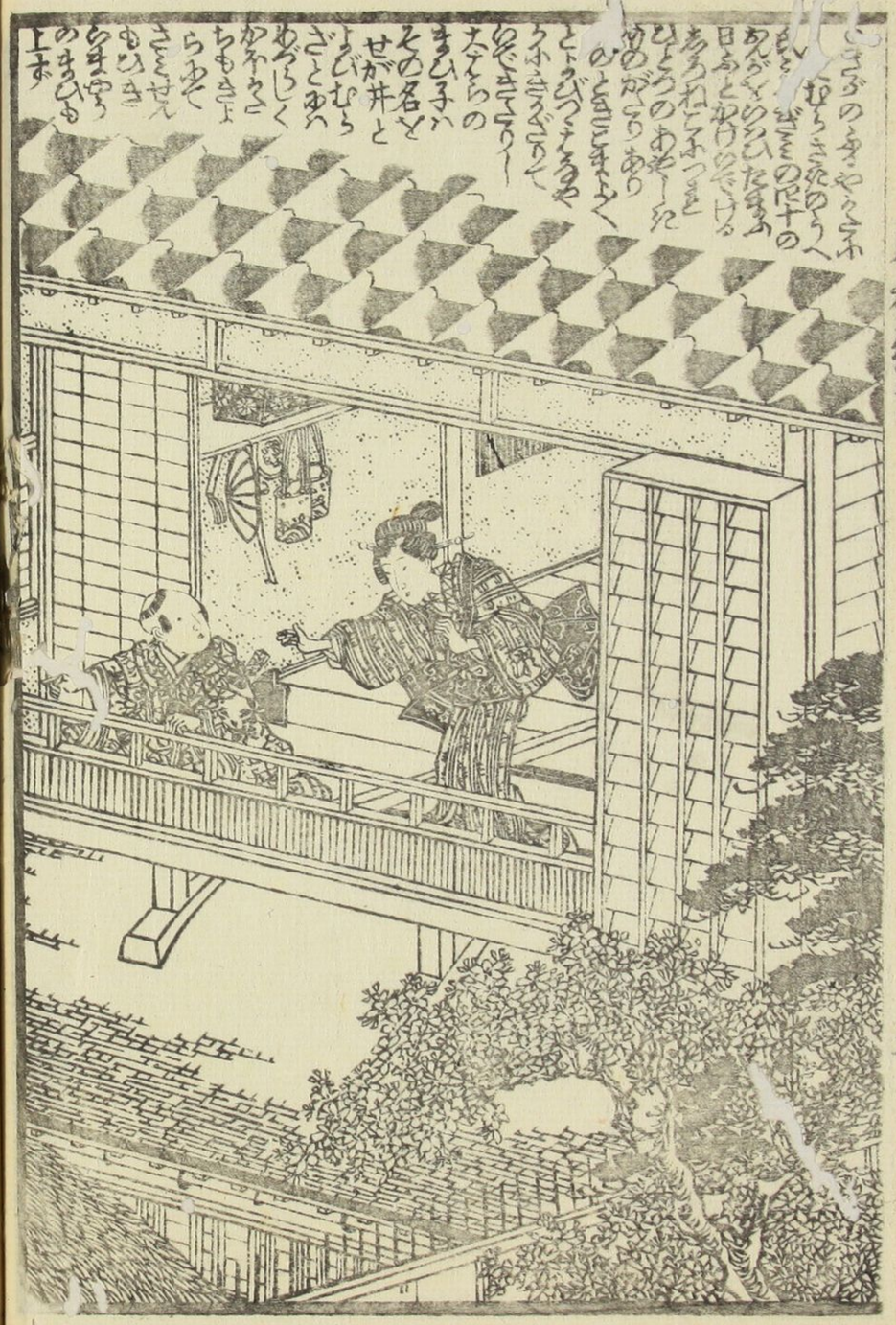
眉ハ顔面の飾なり合巻に錦繪表紙を装るがごとし此草紙歳月を重
更て中老の美人ヨヌく眉の有のハ明石姫と二會の両個耳其中一人ハ
十四や五で早初産とハ情なし新しく彫楼木に花乏くてハ其詮なしと
子を設ても半元服是當代の風俗なるねど古来婦人の眉を剃るハ
自在に画ん為にして下流ハ眉つくらぎと伊勢家の書大上らう此名の事に見えたる
も生眉剃らぬ證なと古例を些と引眉に阿古木も未来で再勤歌舞
の廿の面影に画なが便画工の案じ有が中にも此一編渉めでこの引
續きあれにもなくまどくもなけまばどるこの眉も嚬ぬかわり眠氣ハきろと
満潮に月の明石の宗入が夏の話の蓬莱山亀戸の茶に罪を免し
かわらぎ此殘を願ひ侍り

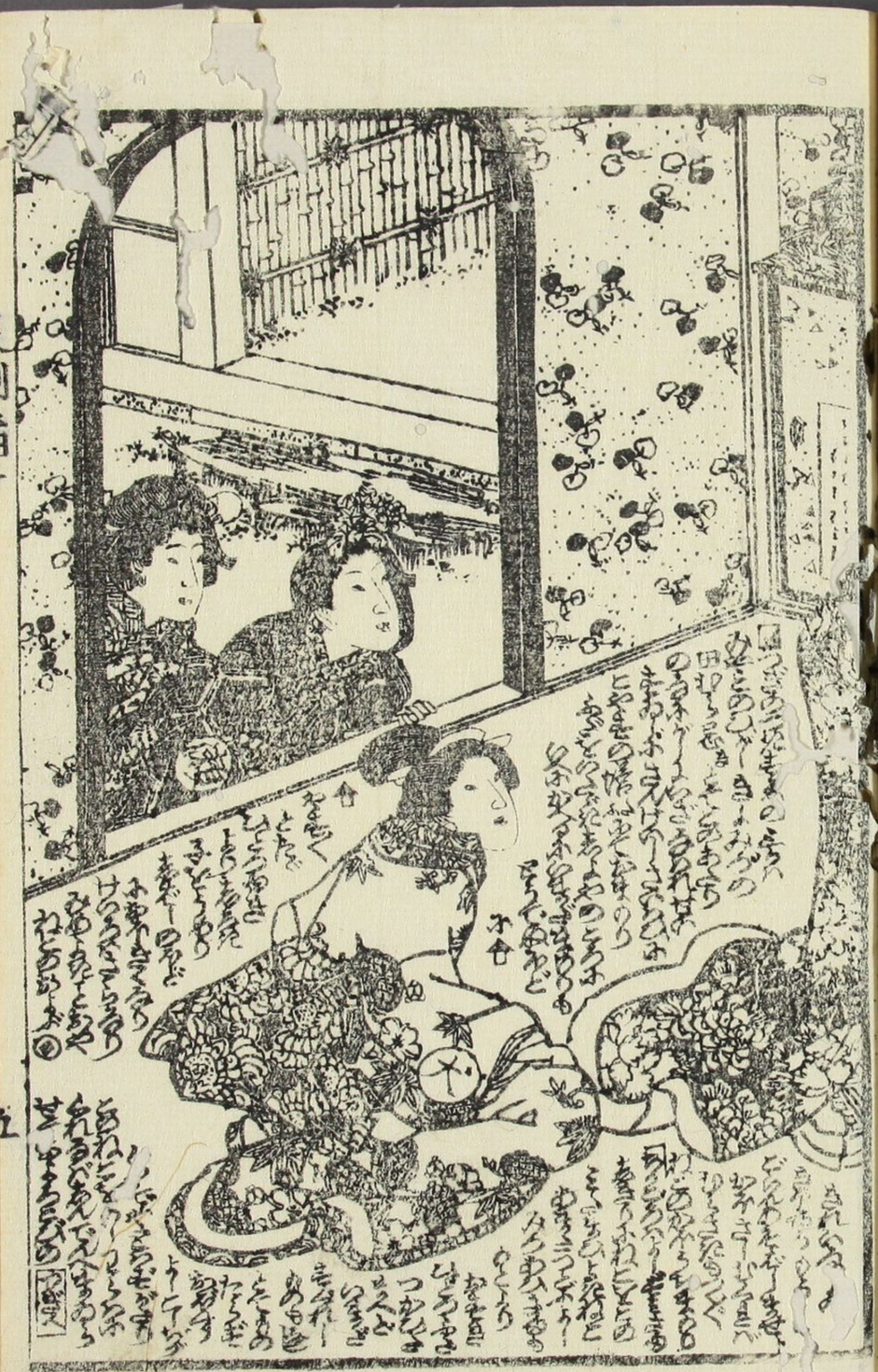
壬子新鐫

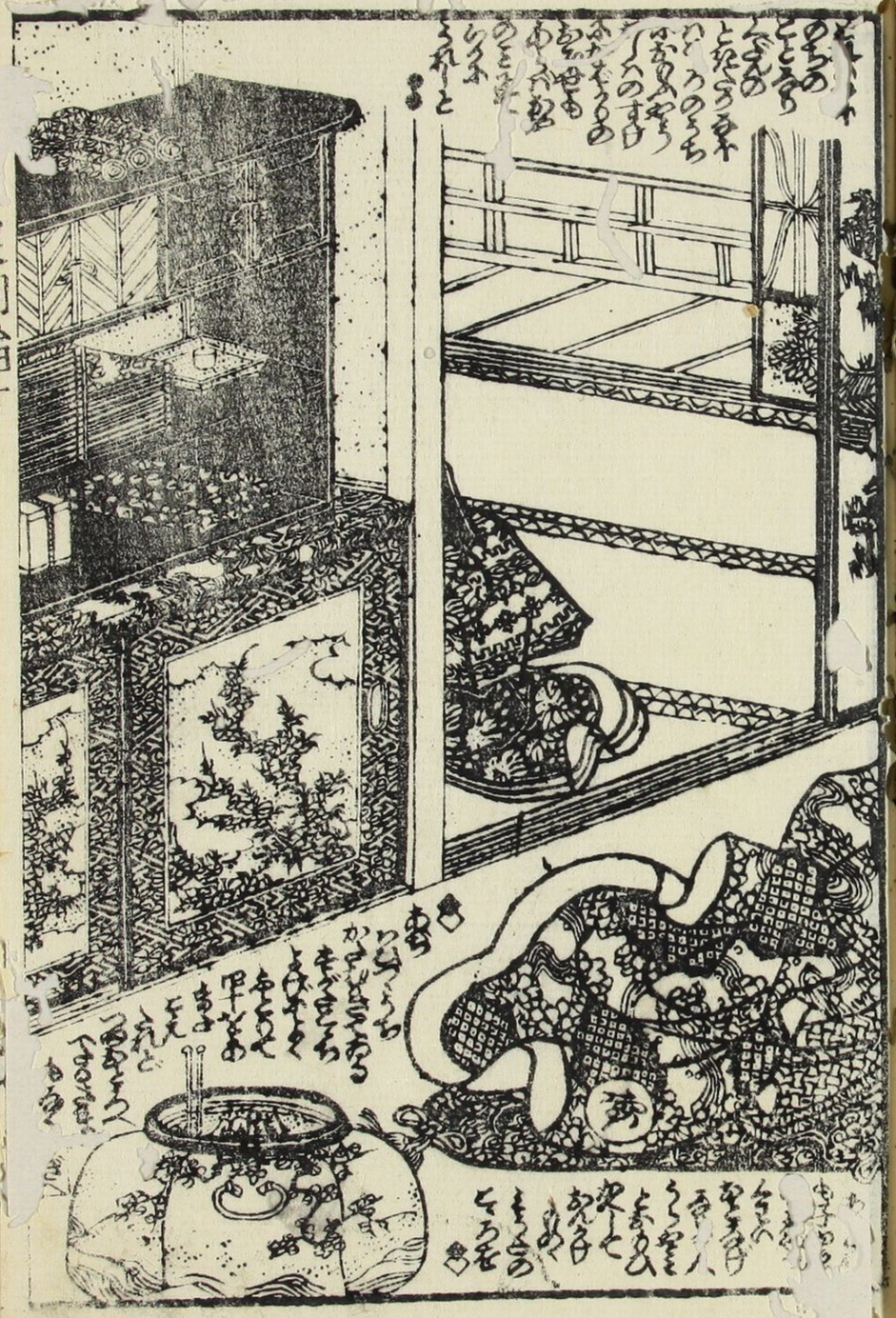
笠亭仙果

後梅津泙之丞
仁木良清女浦船
後綱と改む

足利氏充公
微服潜行して
世上の動静を
窺ひ
小草履取 櫛若







阿古木

二葉の前

嘉永五年新彫

新刻校正 御江戸昌平町鑑 全二冊出版

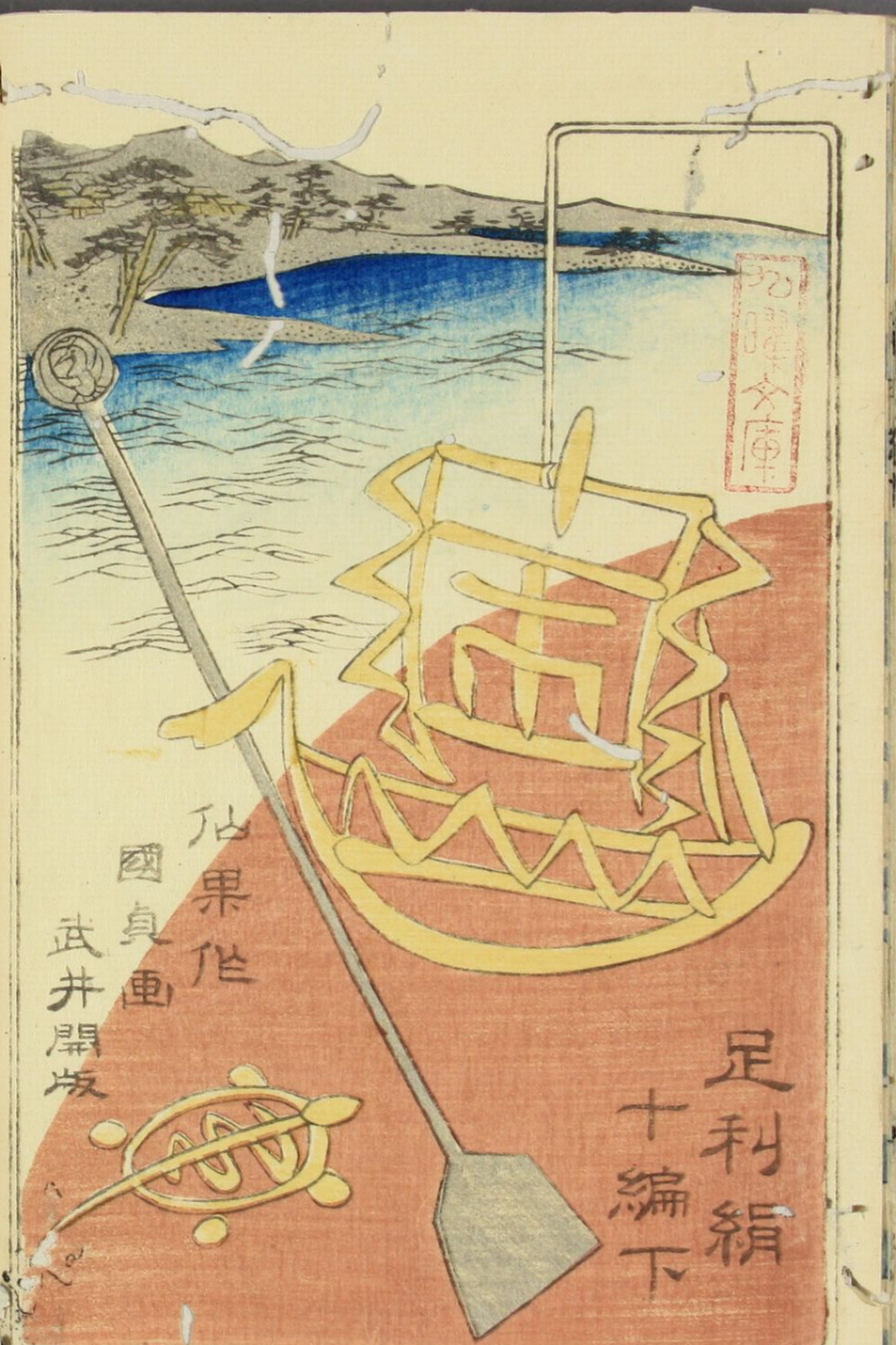
宋字細註横本 半紙摺薄用摺

教訓浮世めぐみ 全三冊 万亭應賀作 溪齋英泉画

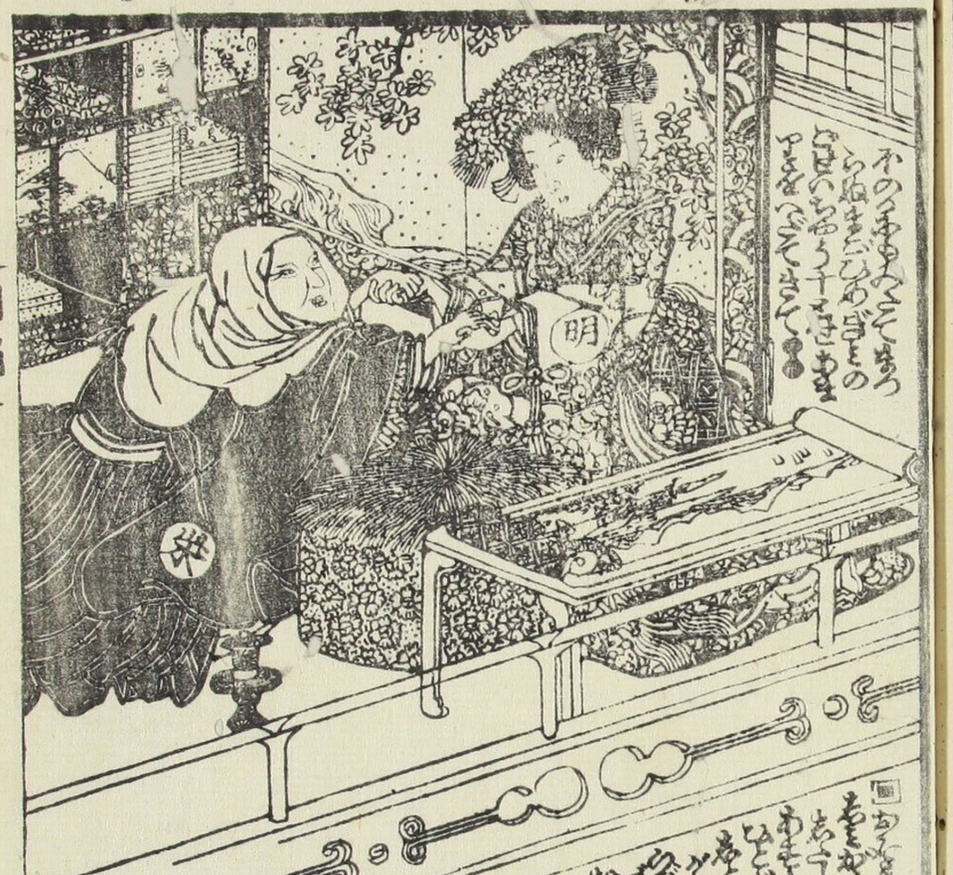
兩筋戀ぢ山道 全二冊 万亭應賀作 一勇齋國芳画

亀鑑浦嶋草紙 初編 笠亭仙果校合 柳齋琴繁作 錦朝樓芳虎画

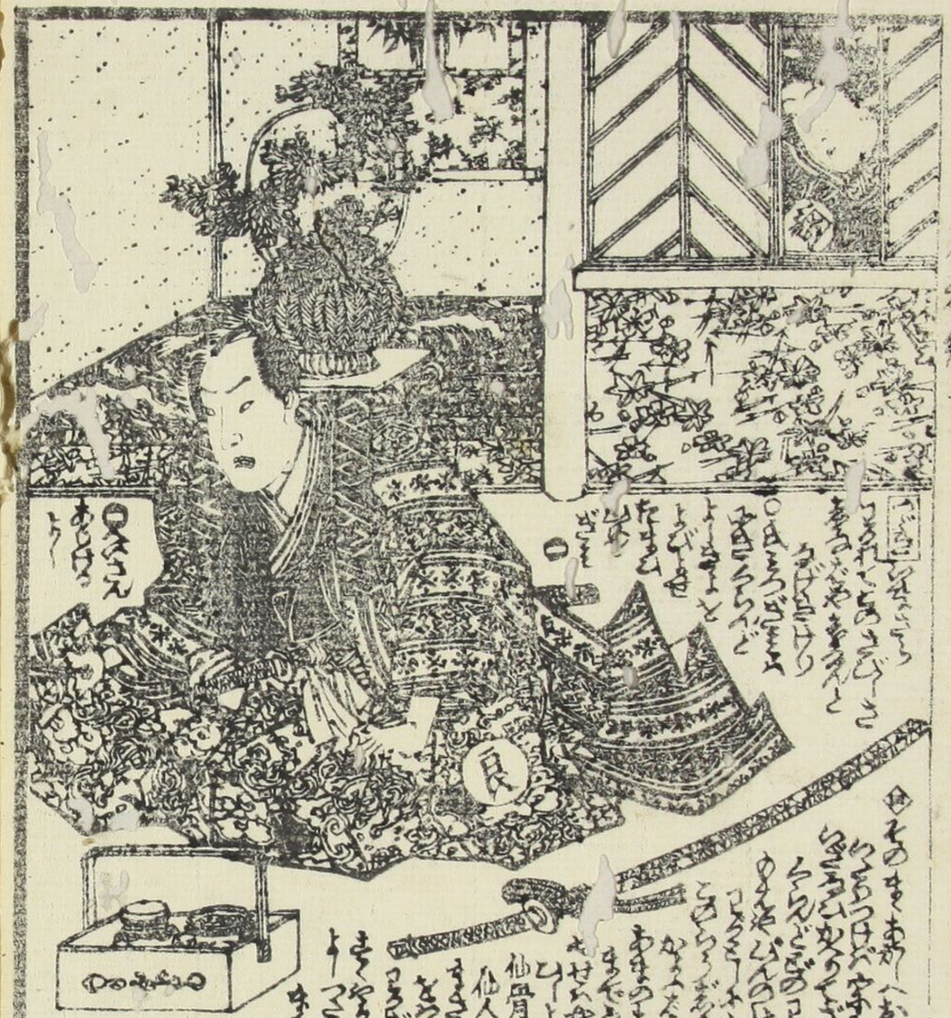
刊行書肆 東都 錦林堂

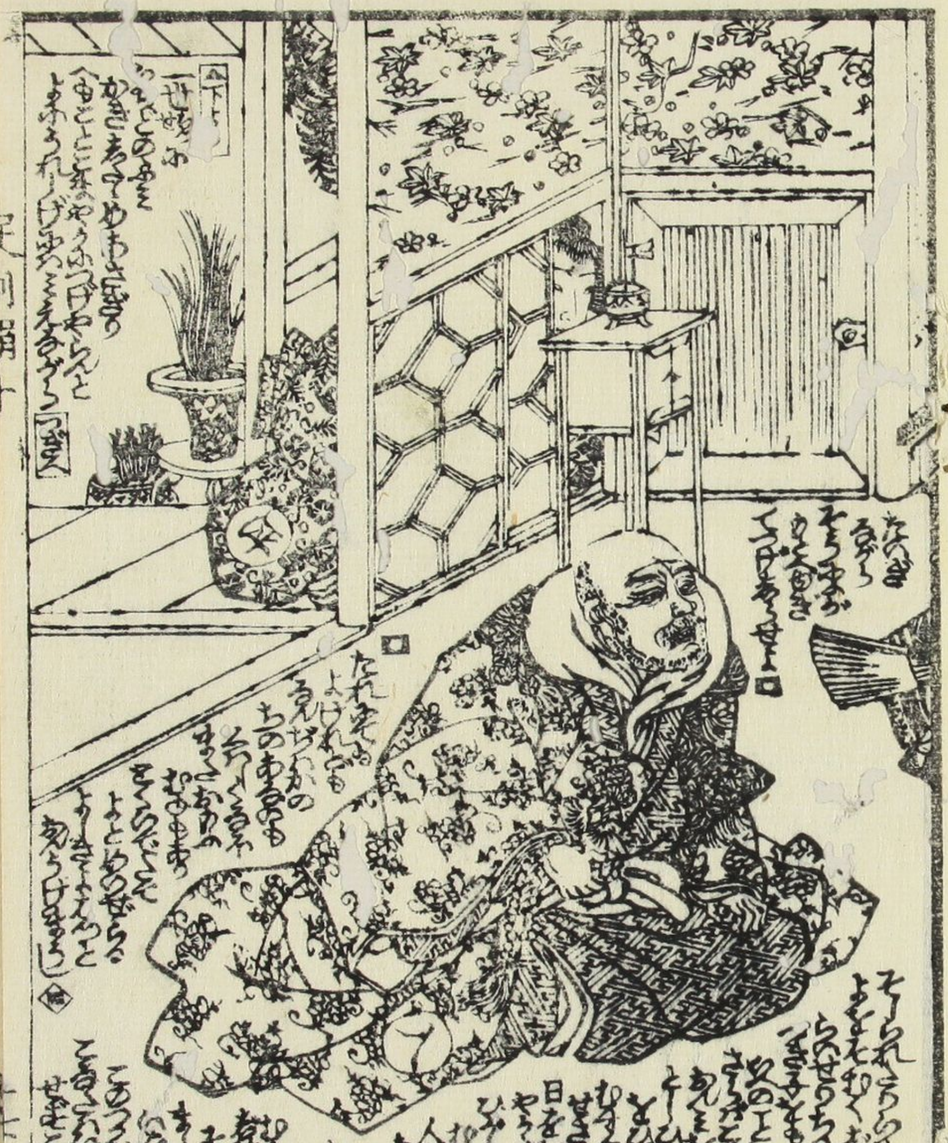


足利絹
十編下


明
女

男
吹





仙果作
國貞画

嘉永五年壬子新刊

足利絹手染紫

笠亭仙果作
一陽齋豊國画

○十編より十四編まで當子春發兌若菜の上第十二編にて
今くにとり十三編より同下いよ〳〵こうあひ姫柏之助意等の
こんこん人情の極意をかきあらさせ この事入目覧は右くさ草紙大當にれめ

極彩色 てのしかぎぬ染上り大雙六

袋入 一枚摺

これもむかしにゆかりの芳藤画にて調進仕は清評判なるべ
やみくしたまはれ希しく

山東京談 婀娜櫻

種吉作
芳虎画

右初編の西京景物延引仕は歳末
おそくも美出し申は

東都神田鍛冶町二丁目
太田屋佐吉謹白